

人気AV男優に

SNSで自らコンタクトを取って

彼氏(夫)に内緒でお股を濡らして

大喜びでパコられにいった彼女(妻)

犬文庫 029

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

第一話

日曜日の午後。大学生の祐介は、一人暮らしの部屋で、彼女の『みる』と、まったり過ごしていた。特になにをすることもない。二人でローテーブルの前に仲良く並んで腰を下ろし、たまにたまそのチャンネルになっているだけのテレビをぼんやりと眺めている。全く生産性のない時間だ。だが、祐介の満足感は並々ならぬものがあった。大好きな彼女と、こうしてなんでもない平和な時間を過ごしているだけで、彼は充分過ぎるほどに幸せなのだった。

「あはは♪この芸人さん、おかしい〜♪もう…うふふ」

みるが彼女らしくとても上品に控えめに、それでありながらとても楽しそうにきゃぴきゃ

ぴと笑う。祐介は何気なくその横顔に視線を送り、そしてその微笑みにまんまと見惚れてしまふ。

みるはサラサラの黒髪ロングヘアが特徴的な、正統派美人だった。目鼻立ちが感嘆するほど綺麗に整い、本当に女優さんにでもなれそうなレベルのルックスだ。女性にしては背も高い方でスタイルも良く、それでいてしつかり胸は大きく、出るところはちゃんと出ている。街を歩けば振り返る人もいるほどの美女だといっても、決して大袈裟な話ではなかった。

けれどそれを鼻にかけたようなところは一切なく、みるはとてもおしとやかでしおらしい性格をしていた。すこぶる女の子らしく、人間としても極めて真面目で常識的。デートをしていても、彼女の対外的な所作等から、祐介はつくづくそれを思い知らされる。

ここまでくると、こんな最高の女の子が、自分なんかの彼女に収まっているのが、もはや申し訳ないくらいだった。二人は同じ大学の同学生年で、共通の友人の紹介で知り合ったのだが、祐介は一瞬で彼女の虜となり、出会ってから交際を開始させるまでにそれほど時間はかからなかった。今となってはその友人にいくら感謝しても感謝しきれない。

「……………」

「…ん？どうしたの、祐介くん？」

あまりにもまじまじと見入ってしまったいたらしく、不自然な視線に気づいたみるは顔をこちらに向けた。その一瞬の表情。祐介に問いかけながらも、彼の全てを優しく包み込んでしまふかのような、聖母の如き表情…。

「い、いや、なんでもないんだよ…」

「えー。ホント？？なんだかじい〜と見てたで

「しよ、私の顔？なんなの、なんなの〜？」

今度は悪戯っぽく祐介を追及する、朗らかに咲き誇った花のような笑み……。一つ一つの表情が、いちいち可愛らしく、いちいち度を越えて魅力的なのだ。

（ああ〜もう…なんなんだよ、この子は……最高すぎるだろ！）

付き合い始めてもう一年以上経つが、祐介はいまだにこうした初々しい恋心から全然抜け出せずにいた。

「いやいや、ホントになんでもないんだって」

「ほんと〜？」

「ホント、ホント。ただ、みるが可愛くて見惚れちゃってただけだから」

「またあ〜。そうやっていつもからかうんだから、祐介くんは…まあいいけど……ええっ！」

突然、みるが大声をあげた。その視線は、祐

介からテレビの方へと既に移っていた。日曜午後の、低俗なバラエティー番組の再放送。今はその合間のCMが流れていたのだが、その映像の中に、みるは、とある人物を見つけてしまったのだった。数日後に放送される、深夜バラエティーの告知CMだった。

「なんで…うそ…」

うわ言のように呟いた後、みるは自らのスマホを取り出し、なりふり構わぬ様子でネットでなにやら検索する。当然のことながら件のCMは一瞬で終わっていた。

「……ええっ！」

目的の情報にたどり着いたのか、みるは再度調子外れの大声をあげた。祐介は隣から、彼女の手中のスマホを覗き込む。

そこには、某人気AV男優が、先程CMで見た深夜のバラエティー番組に出演するという

ネットニュースが映っていた。最近の多様性時代の流れなのか、アダルトビデオで活躍する女優や男優が、有名になったりインフルエンサーになったりすることも今では珍しくなくなつた。だから、テレビにAV男優が出演したところで、取り立てて騒ぐようなことではもはやないはずだ。そういうこともあるだろう。

では、何故、みるはこんな尋常でない反応を見せているのか。

それは、彼女がこのイケメンAV男優の大ファンだからに他ならなかった…。

「……テレビ出るの、ハルトくん？」

「うん…そうみたい…はあ…どうしよう…ああ！やばい！超嬉しい！ついにテレビ出ちゃうんだ、ハルト様！」

恋する乙女のような露骨な反応に、祐介は複雑な気持ちで苦笑するしかない。

全く非の打ちどころのない完全無欠の理想の彼女のように見える、みる。だが、唯一のマインナスともいえるのが、この点だった。彼女がとあるAV男優の大ファンで、恐らく女性として彼に憧れているということ。最近人気AV男優をアイドル視してキャーキャーメロメロになっている若い女性も少なくない。彼等は皆、高レベルのイケメン揃いで、女性向けのAVなるものまで存在するのだから、それも無理からぬことなのだろう。

だが、みるがそんな女性たちの一員であるということとは、きつと意外に思われるに違いない。昨今のAV男優はSNSでの発信や各種メディア出演なども盛んで、その位置づけは普通の芸能人なんかともう変わらない感じだが、彼等の主戦場はあくまでAV、エロビデオなのだ。みるはエロビデオを見て、エロビデオでセック

スする彼を見てファンになったに違いないのだ…。

女性がAVを見ても、現代ではもうおかしいことではないのかもしれない。けれど祐介は、みるが正直に秘密を告白してくれた時、やはりショックだった。こっそりAVを見て、特定のAV男優の大ファンになっているという事実が、純粹で真面目なみるのイメージと、あまりにかけ離れていたからだ。

だが祐介は、それ以上に包み隠さず全てを彼氏にさらけだそうとする、みるの誠実さに、胸を打たれていた。隠していたっていいことのはずなのに、彼女はきつと祐介と真に信頼し合った関係を築くために、わざわざ自らの負い目を晒してくれたのだ。そう思うと、次第に気にならなくなった。いったのだった。

「あ、ごめん！…よくないよね…祐介くんの前

で、こういうの…ごめんなさい…」

みるはハツとした様子で態度を変えた。心から申し訳なさそうに、律儀に頭を下げる。

「いやいや、いいよ、別に。そんな謝らなくて。気にしないで。っていうか、テレビに出るなんてすごいじゃん、へー。おめでとう」

「うん…ありがとう…」

こんな風に、みるは秘密を明かした上で、祐介に多分に気を使ってくれている。もうそれだけで充分だった。

確かに、彼女が特定のイケメンAV男優の大ファンだなんて、彼氏にとってはきつと喜ばしくないことだろう。だが、どんな女の子だって、男性アイドルや男性声優などの有名人に、少なからず憧れたりするものだ。祐介の中では、もはやそれと変わらなかった。

いくらファンであっても、それはあくまで遠

くから応援しているだけ。彼女とそのAV男優との間に実際になにかがあるわけでもないのだし、祐介は本当にもうなにも気にしていなかった…。

※※※

「名前なんだっけ、もう一回教えてくれる？」

「あ…み…みる……みる…です…」

「はは、緊張してかわいい〜。…で、そのみるちゃんは、今どこでなにをしてるのかな？」

「はあ…えっと…その…く…車に…乗ってます…」

「誰の車？どこの誰の車？」

「はあ…ああ…ハルト様の…え…AV男優さ

んの…は…ハルト様の車です…」

「ふふっ…なるほど…。で、その車は、今どこに向かっているのかなあ〜?」

「はあっ!んん…ゴクッ…ああ…ら…:…ラブホテル…です…」

「あはっ!ラブホテルに向かってるんだ、この車(笑)!でも僕と君って、ついさっきの待ち合わせで初めて会ったばっかだよね?それなのに、もう僕とラブホテルに行っちゃうんだ、みるちゃん?」

「はあ…んんっ…はい…そ…:…そうです…」

「ははっ!で、みるちゃんは、そのラブホテルで、今日初めて会ったAV男優のハルトくんと、なにをするのかな〜?自分の口ではっきりと宣言しちやおう!」

「ああ…んん…:…え…:エツチ…:で…:す…:。ああ…:みる…:この後…:はあ…:え…:AV男優さんの

…ああ…ハルト様と…え…エッチ…し…しちやいます…んん！」

「あはははははは！すげえ！この子マジウケるよ！」

車を運転する人気AV男優のハルトは、大声で笑った。助手席には、綺麗なサラサラ黒髪ロングヘアーの若い女性が申し訳なさに肩をすくめて座っている。柔らかい感じのカーディガンと清楚っぽいプリーツスカート。白を基調とした地味目のコーディネートからも、その純朴さが伝わってくる、とても彼のファンとは思えない女性だった。

彼女はSNSで向こうからコンタクトを取ってきた、彼の熱心な信者だった。こんな風にネットで知り合ったファンの女性を釣り上げて軽うしく食べちゃうことは、ハルトにとってなんら珍しいことではなかった。むしろ日常茶

飯事といえる。

金髪の爽やかイケメンで、ナルシストな王子様キャラのハルトは、女性AVユーザーに超モテモテだった(ちなみにファンの女性は彼のことを敬意と愛を込めてハルト様と呼ぶ)。そしてAV男優という仕事柄もあって、相手の女性たちも、そのような行為に及ぶことに抵抗は少ないらしい。これまでに数え切れないほどの女性ファンを、彼は平気で毒牙にかけてきた。だが、今日の獲物は今までに類を見ないほどの上物といえた。黒髪ロングのおよそAV好きとは思えない外貌。目鼻立ちが端正に整った、女優かモデルの如き顔面。こんな高レベルの女が向こうから股を濡らしてホイホイやって来るなんて、ハルトは笑いが止まらなかった。

「ふふっ：あくこんな可愛い女の子を簡単に食えちゃうなんて、ホントたままないよ。あ

はは(笑)」

綺麗な女性ならば仕事で散々抱いているが、やはりプライベートのセックスは得られるエロチシズムが違うのだった。

「改めて確認しておくけど、ホントにいいんだよね？もう、すぐ、パコっちゃっていいんだよね？」

「はあ…はい…ああ…ゴクツ…いいです…ああ…ぱ…パコっちゃってください♥」

助手席の彼女は、頬を赤らめながらも自らの意思ではつきりとそう言った。

「あはは、すごお〜い(笑)。意外にノリノリじゃん、君！そうだよね、自分からSNSでコンタクト取って、僕に抱かれに来たんだもんね。僕とオフパコしたかったんだもんね」

「はあ…んん…はい…そうです…」

「いひひ…オフパコだよ…オ・フ・パ・コ♪と

っても不埒でいやらしい行為、オフパコ(笑)。陰キャのネット民から蔑まれまくる最低の行為、オフパコ(笑)。みるちゃんは僕とそれがしたくて仕方なかったんだよね？」

「はあ…んん…ゴクツ…:…はい♥」

「自分の口ではつきり言いなよ。僕とオフパコしたかったって」

「ああ…ゴクツ…:み…:みるは…:んん…:は…:ハルト様と…:んん…:大好きなAV男優さんのハルト様と…:お…:オフ…:パコ…:…:オフパコ!すぐくしたかったです!ああん!」

「にやははは!ホントすげえや、この子。じゃあちよつとその辺の経緯を自分の口で説明してみてよ。君はあと少しで僕にパコられる。本当にパコられる。その状況に至った流れを、いわば君の恥の流れを、自分の言葉でもう一度僕に教えてみせてよ」

「はあ…ゴクツ…わ…わかりました…」

ラブホテルへ向かう車の中で、ハルトはみるに質問するような形でことさらにいやらしい言葉を吐かせようとしていた。これは、ハルトが得意とするある種の羞恥プレイだった。王子様系でありながら超ドSでもある彼は、出演作でもこんな風にねちねちと女性を責めることがよくあった。当然みるもそれは知っている。彼女はむしろ喜んで、AVで見た彼の憧れの攻めを疑似体験しているのだった。

捕獲したバカ女に卑猥なセリフを口走らせながら、ハルトは淡々と車の運転を続ける。肅々と目的地は近づいてくる。今日初めて会ったばかりの女のマンコに、彼のチンポがぶち込まれる瞬間が、着実に近づいてくる…。

「はあ…私…その…んん…ハルト様の…だ…大ファンで…ああ♥は…ハルト様のこと…大

好きで…それで…ネットのファンの間で…ハ
ルト様…結構その…ああ…ファンと…その…
エッチっていうか…はあ……オフパコして
くれるって…その…知ったんです」

「あはは！やべ、バレてんの？僕のオフパコ三
味♪ファン食い三味♪ウケるんですけど(笑)」

「はあ、はい♥ああ…ふあ、ファンの子達…み
…みんな知ってますよ？ハルト様が…ああ…
ファンとオフパコしまくってること(笑)♪あ
はは…はあ…それで…SNSでコンタクト取
って…ああ…見事にパコってもらったって子
をネットで見つけて…その子超喜んでて超幸
せそうで…それで…その…私もって思って…
ああ…SNSで…ああ…DM送ったんです…」
「ふふふ、君、最初から超積極的だったもんね
(笑)。それで最終的になんて書いたんだっけ、
DMに？ほら、もう一回自分の声で言ってみな

さい」

「はあ…ゴクツ…は…ハルト様に…ぱ…パコ
らりたいですって書きました！あああん！ご
めんなさい！」

「あははははは！すげえ！でも謝ることなん
てないよ、すごく光栄だよ♪こんな可愛い子に
オフパコ志願してもらえるなんて…今日はあ
りがとうね、みる」

「はあ！い、いえ！こちらこそ！こちらこそ本
当に今日はありがとうございます、ハルト様！」

「ふふふ、いえいえ、どういたしまして。…と
ころでさあ、僕今度、テレビ出るんだけど、知
ってる？」

「あ、はい、知ってます！おめでとうございま
す！…この前テレビ見てたら、いきなりその番
組のCMが流れて…ドキッてしちゃいました
…」

「ふうくん。ちなみに、その時はもう僕とオフパコの آپ取った後だった？オフパコするって決まった後だった？」

「あ、はい…決まっちゃいました…そのCM初めて見た時は…もうハルト様とオフパコするって…」

「にひひ。じゃあ私がオフパコする人がテレビ出るんだあ、私テレビ出る人とパコパコするんだあ…って思ったわけだ(笑)」

「はあん！もう…やだあ…ハルト様あ♥」

「あはは。でもヤバイよね？テレビに出るほどメジャーな人間が、こんなにファンの女の子食いまくってるなんて」

「うくん…そう…ですかね？そんなこと…ないんじゃないですか？はあ…ハルト様のファンの子みんな…ハルト様に抱かれたがってるわけですし…それで承知の上でパコられてる

んで：別に：：なにも問題ないと思うんですけど：：」

「そう？じゃあこんなになにファンとパコパコしまくっても、僕はなにも悪いことしてないってこと？」

「はい♪ハルト様は、なにも悪いことなんてしていません♪：だからこれからも：いっぱいファンの女の子達をパコパコしてあげてくださいい♥」

「あはは！嬉しいこと言ってくれるじゃん！君みたいな優しいファンの子ばっかでホント幸せだよ、僕！僕のことなんでも許してくれて！簡単にお股にチンポ挿れさせてくれて！ホント、最高だよ！みるちゃん、僕のこと好き？大きな声で言ってみてよ！」

「はい！好きです！大好きです！みる！ハルト様のこと、もう大大大大大好きです！

本日はパコっていただけで、本当に幸せです！
本当にありがとうございます！」

「あははははは！すげえ〜！やべ、マジ幸せ
すぎる！そんな風に言われたら、もう勃っちゃ
うよ！ギンギンにチンポ勃っちゃうよ、僕！」

「あああん♥もう、やだあ、ハルトさまあん♥」
「あははははは」

万感の思いに包まれながらも、ハルトはこの
女の緊張がほぐれ、次第にその本性が顔を覗か
せつつあることを、冷静に見抜いていた。清楚
そうに見えてはいても、所詮はAV男優に憧れ
るエロ女である。それも自らオフパコを志願し
てくるような超ド級レベルの。彼女の中には、
自らいやらしく、みつともなくなりたいという
志向があるに違いないのだ。

AV男優は質問を続ける。

「それでみるって、彼氏いたんだっけ？」

「ああ…はい…い…います」

「いるのかよ！いやなにしてるんだよ！彼氏
いんのにオフパコなんてしに来ちゃダメでし
ようが(笑)！」

「あああん、ごめんなさい♥あはは。…はあ…
ホントですよ？ヤバいですよね(笑)？彼氏
いるのにAV男優さんとオフパコなんて♪う
ふふっ…実は例の番組のCM初めて見た時、な
んと、隣に彼氏いたんですよ(笑)。だからび
っくりしちゃいました。なんか浮気することバ
レちゃったみたいで(笑)。あはは。それで彼氏
ったら、ハルト様がテレビに出演すること、私
におめでとうなんて言うんですよ？ヤバくな
いですか？正にその人に自分の彼女パコられ
ること確定してるのに(笑)。私、彼氏には申し
訳ないんですけど、思わず吹き出しそうになっ
ちゃいましたもん♪」

「ぎゃははは！やべっ！君って相当悪い女じゃない、みる！」

俄然饒舌になってきたみるに、ハルトは内心ほくそ笑む。

「はああん♥ご、ごめんなさい…あは♪」

「その様子じゃあ、彼氏に隠れて浮気しまくりなんでしょ？ほら、正直に答えてごらん」

「いえ、そんな。ないです、私。浮気なんて」

「うっそだあ。え、じゃあセフレもないわけ？」

「はい、今はいません」

『『今は』ってことは過去にはいたってことじゃない！なに自分で墓穴掘ってるんだよ！はっ！』

「はあっ！ああ…やだあ♥」

「ふふ、今はないけど、前はセフレいたことあるってことでオツケーだね？」

「はあ…ああ…ゴクツ…：はい♥前は…その
：今の彼氏と付き合う前…前の彼氏の時は…
：いました。でも…それは前の彼氏の時…ちよ
つと遊んじやってた時代の話で…なんかそう
いう時期だったってだけで…その…今の彼氏
と付き合ってから…は…本当にそういうの…な
いですから…」

「ふうん…それは複数人？セフレは複数人い
たわけ？」

「それは…：ご想像にお任せします」

「あはっ！そんなのもう複数人いたって白状
してるも同然じゃん！セフレいっっぱい、いた
んだね(笑)！みるちゃんは可愛い顔してセフ
レ複数持ちだったと(笑)！あはは！みるちゃ
んってば、超おもしろおい」

「あああん♥もう、ハルト様の意地悪う♥ホ
ントに今はないんですからね、そういうの」

「あはははは！…みるは…エッチ好きなんだね？」

「あはっ。はい…もう、大好きです♪」

みるはもはやなんら隠したりすることなく、朗らかに堂々と答えた。少しの茶目っ気すら含ませて。彼女の心だけでなく、その体も火照って出来上がりつつあることが、AV男優には手に取るようにわかった。

「くふふっ。正直だねえ、みるは。そんな黒髪ロングの清楚系の見た目してるのに、意外すぎてびっくりしちゃうんですけど」

「え、そうですか？友達とかも、私と似たタイプの清楚系の子多いですけど、エッチ大好きですよ、全員(笑)？あはは。っていうか、このくらい年齢の女の子なんて、みんなエッチ大好きで普通じゃないんですか？」

「にひひ、すげえ。ということは、みるはエ

ツチ大好きの、チンポ大好きってことでオツケ
ー?」

「はあああん!もう、やだあ、ハルト様♥セク
ハラひどすぎい〜(笑)」

「いや、そういうことじゃん?ほら、答えて、
みる?みるはチンポ大好きなんでしょ?」

「ええ〜もう……だいすきでえ〜す(笑)。あ
ははは!」

みるはその卑猥すぎる質問にも、冗談めかし
て楽しそうに答えたのだった。

「あははははは!ヤバい!もうヤバすぎるっ
て、みる!ひひひ、いやあこれ、もう親泣いち
やうやつでしょ?みる、大学生なんでしょ?大
学で頑張って真面目に勉強してると信じてる
娘が、チンポ大好きで毎日エッチしまくりで、
あまつさえAV男優に自らお股濡らしてチン
ポ突っ込まれに会いにいつちやうなんて。嫁入

り前の娘がこんなことになるなんて、親の絶望
ハンパないっしょ、これ(笑)」

「ええ。そんなことないですよ。私、勉強だつてちゃんと真面目にしていますもん。エッチも：確かにしまくってますけど(笑)」

「ふふっ、じゃあちゃんと親に大声で謝ってお
うか。こんな風に：」

ハルトは、みるにとあるセリフを指示した。
こうやってお間抜けな破廉恥セリフを言わせ
ることも、彼が出演するAVの一つの特徴だつ
た。従つて、みるはその命令をなんら戸惑うこ
となく実行することが出来た。

「はあ：ゴクツ：：んん、お：：お父さくん、お母
さくん！ごめんなさあ！：い！二人が手塩に
かけて育ててくれた娘のみるは、え：：エッチ大
好き超おバカ女子大生になっちゃいましたあ
ゝ♪みるは大学で全く勉強なんてせずに、色ん

な男とエッチしまくりパコパコキャンパスラ
イフエンジョイしちやつてまあ〜す♪いえ
〜い(笑)♪あはっ！はあ…それでおバカ
ドエロ女になつちやつたみるは、女の子なのに
AVを見まくって、AV男優さんのことが大好
きになつちやつて、自分からコンタクトまで取
つちやつて、今日はこれから、会ったばかりの
AV男優さんに、思いつつっつ切りマンコにチ
ンポ突っ込まれちゃいまあ〜す♪そんで
マンコ滅茶苦茶に犯されちゃいまあ〜す♪
お父さ〜ん、お母さ〜ん！みる、AV男優さん
のチンポ！もうすんごく楽しみでえ〜す！
本当にごめんなさあ〜い！ぴーすぴーす！
ああっ！もう！なんてこと言わせるんですか
(笑)！きゃはは！

「うわ。やべ。きちやつたわ」

ハルトは一転して、切羽詰まったような口調

と表情になった。今のみるのセリフが、その恥知らずすぎるあけすけな言い方が、彼の性興奮の琴線に触れたらしい。彼は道路の傍らに、突然車を停車させる。

そして興奮に我を忘れた感じで助手席に座るみるに体を被せると、なんの断りもなくその豊満な二つの胸を、シートベルトの上からガシガシとまさぐりだしたのだった。

「はぁあん♥ん…ううん♥」

「ああ…やべ…たまんね」

さらにハルトは、みるの長めのプリーツスカートを惜しげもなくたくし上げ、その内部を剥き出しにする。みるのイメージに合わない真っ黒な妖しい下着が、顔を覗かせる。

ハルトはその下着の上から、みるの女性器を手指で乱暴に刺激する。擦るように揉むように、なんの遠慮もない動物的な激しい愛撫を展開

する。

「はあ…ああっ！はうん！」

「ああ…ああ…んん、ぶちゅうううう！」

続けてハルトは、みるの顎を強引に掴み、
荒々しく唇を重ねた。

「ぶちゅうう！ぐちゅううう！ぶちゅぐちゅ
ずちゅうう！」

「はあん！んん…れろ…えろ…んん…ぬちゅ
…えるっ…えろ…くうん♥」

彼はみるの口内に滅茶苦茶に舌をねじ込み、
豪快で野蛮なベロチューを繰り広げたが、みる
はなんら抵抗することなく、むしろ彼に全てを
捧げる感じでその体を心持ち彼の方へと傾け
ていた。そして舌の侵入に対しても、自ら口を
大きく開いて、伸ばした自身の舌を全面的に彼
の前に晒すようにしていた。彼がしたいベロチ
ューを、思うまましていただきたいでもいう

かのように…。乳房にしても股間にしても、同じようなスタンスで、みるはハルトにさらけ出していた。彼女はこのAV男優の赤裸々な性の獲物と化すことを全く厭わなかった。いや、むしろ喜んで自らそれになろうとしていた。

「ぷはっ！ああ…はあ…やべ…もう爆発しそう…僕…見境なくなっちゃいそうだよ…みる」

「ああ…ハルトさまあ♥」

「…すぐそこだから…ラブホ…。AV男優の…本気のセックス…存分に味合わせてあげるね…」

「ああ…う…嬉しいです…ありがとうございます…ます…ハルト様…♥はあ…みる…今日どうなっちゃうんだろう…ああ…もう……すんごい濡れちゃう♥」

みるは表情をトロトロにとろけさせ、瞳を爛々と輝かせていた…。

※※※

「…………ダメだ。出ないな、みるのやつ」

午後三時。祐介はみるに電話したがつながらなかった。今日は休日で、ほんの数日前にデーとの提案をしたのだが、みるは気乗りしないのか、やんわりと言葉を選びながら断られてしまった。なにか予定があるような雰囲気でもなかった。なので、せめて少しだけでも電話で話したいと思ったのだが、やはり忙しいのかもしれない。非常に残念だった。

まあ、直前になって誘った自分が悪いのだ。祐介は観念して、部屋で一人淋しく過ごすことにした。適当に漫画でも読む。が、集中出来な

い。瞬間瞬間、常に頭の中にみるのことがのぼ
つてきて…。

（ああ…みる…俺だけのみる…お前はなんで
そんなに可愛いんだろうな…）

清楚の象徴たる長い黒髪…。ナチュラルに他
者を幸せにする柔らかい物腰…。咲き誇るよう
な優しい笑顔…。

部屋で一人でいても、みるの存在が溢れに溢
れ、祐介はとても幸せな休日をお過ごしことが出
来たのだった…。

※※※

「…みるちゃん、なんか電話かかってるみたい
だけど、いいの？」

「はぁあん…いいです…もうそんなの…今は…」

サイドテーブルの上に置いたマナーモードのスマホが、バイブレーションのみで着信を知らせていた。

「あはは。誰がなんの用でかけてきたのか知らないけど、今みるちゃんがなににしてるか知ったら、仰天して気絶しちゃうだろうね。みるちゃんが本当はこんなことする子だっけと知らないだろうから。…ほら、自分の口で言っごらん。みるは今、なにをしてるの?」

「はぁ…んん…ゴクッ…み…みるは今…あぁ…ら…ラブホテルで…すっ…すっぽんぽんになっ…あぁ…え…AV男優さんに…お…おま…オマンコ…あぁっ!オマンコ!おっぴろげてお見せしています!はぁぁあん!」

「ははは!…すごい」